

一語の解釈の相違から

—伊勢物語第85・86・90・91段の解釈—

竹 岡 正 夫

いかに高尚な文学論も、その根底である作品の文章の解釈が誤っていたのでは、まさに砂上の楼閣に過ぎず、たった一個の砂粒の揺るぎだけで忽ちあえなく崩壊し去ってしまうこともあり得る。

ここでは、一段中の僅か一語の意味の解釈の誤のためにその一段全体が誤解されている例を伊勢物語より4例示すことにする。

○伊勢物語について、今まで下記のような拙論でそれぞれ新しい解釈を試みている。

- 1 「伊勢物語雑語考四題」(川瀬一馬博士古稀記念論文集, 未刊)
- 2 「伊勢物語^{第2・21}_{24・62}段私解」(『香川大学教育学部研究報告・第I部』第44号)
- 3 「清むか濁るか-伊勢物語第111・114段の解釈をめぐる-」(投稿中)

○以下、伊勢物語の底本は天福本系統の三条西家旧蔵本(学習院大学蔵)の影印本を用いた。ただし、読み易いように句読点・濁点・符号を施し、漢字をその上の()内に当てた。

○2回以上引く長い書名は、初出の書名に付けた傍線部のように略称する。

1 めかれせぬゆき

昔、おとこ有けり。わらはよりつかうまつりけるきみ、御ぐしおろしたまうてけり。む月にはかならずまうでけり。おほやけのみやづかへしければ、つねにはえまうでず。されど、もとの心うしなはでまうでけるになん有ける。むかしつかうまつりし人、ぞくなる、^(俗)ぜんじなる、^(禪師)あまたまいりあつまりて、む月なれば、事だつとて、おほみきたまひけり。ゆき、こほすがごとふりて、ひねもすにやまず。みな人、^(精)爰ひて、「雪にふりこめられたり」といふを^(題)だいて、うたありけり。

おもへども 身をしわけねば めかれせぬゆきの つもるぞ わが心なる

とよめりければ、みこ、いといたうあはれがりたまうて、御(衣)ぞぬぎてたまへりけり。
(第85段)

このうちの傍線部の解釈が問題である。『勢語臆断』（契沖）は次のAのように解釈するが、『伊勢物語新釈』（藤井高尚）によりBのごとく改められている。

○A 心は此御子にしたがひつねはまうでもし、又こゝにつかへてもあらばやとおもへどもといふ心なり。されどその心ざしはうちにありて、身より外に取わけてみせ奉るべきよしのなきに、折ふしやむまもなくめがれせずふる雪のつもれるを見たまへ。此つもれるごとく、わがおもひもつもれば、此雪のつもるはずなはちわが心なりとよめるなり。
(勢語臆断)

○B こゝにとゞまりてあらんとおもへどもおもへども、おほやけの宮づかへする身は思ふまゝならず。身をふたつにわくる事もならねば、かへらんとするに、ものうければつくづくと見てをる、此の雪のつもりてかへりがたくなるぞ、もとよりわが本意なるといへる也。……臆断のはじめの説は、いふにもたらぬひがこと也。
(新釈)

ところで「めかれせぬゆき」を、Aはやむ間もなく降り続ける雪と解し、Bはつくづくと見続けている雪と解しているのである。

以後、近代の注釈もおおむねこの江戸期のA・B両説のいずれかに従っている。

A○絶え間なく降る雪。
(岸田武夫『伊勢物語評解』)

○目から離れないの意で、雪の小止みなく降ることをいう。

(日本古典文学全集・福井貞助『伊勢物語』)

○今絶え間もなく降りつづく雪が、こんなに積ってここに閉じこめられるのは、むしろ私の望みにかなったことなのです。

(新潮日本古典集成・渡辺実『伊勢物語』)

B○この歌の意はわかりにくい。「思へども身をし分けねば(宮仕への身で、身を宮中とこちらとに分けることができないので)自離れせしかども、目離れせぬ雪の見ている目から少しも離れず小止みもなく降る雪がどんど

んつもる。この雪のように) 積るぞ吾が心なる(親王をお思いする思いが
つもるのが私の本心です)」の意か。(——部がB, ~~~部がA)

(松尾聰『新註伊勢物語』)

○今、目から離れないこの積雪のように、思いの積っているのが私の心だと
知って下さい。……「わけねば」は「分ち得ぬから」の意らしいが落着かない。
〔補注〕「めかれせぬ」は「雪」の修飾語だが、「絶え間なく降る雪」
と解き、「今雪が間断なく降り積って帰ることのできないようになったの
は私の本望である」と解する説もある。

(日本古典文学大系・大津有一・築島裕『伊勢物語』)

○めかれせぬは、目を離さずにじっと眺める。絶え間なく雪が降ることと、
親王をめかれさせぬようにの両意をかける。

(中田武司・狩野尾義衛『伊勢物語新解』)

○ここは比叡山のふもとであるから雪が目から離れず、絶えず眼前にある
が、

(校注古典叢書・片桐洋一『伊勢物語』)

○今こうしてかたときも目から離れない雪が降り積もっている、その雪のあ
りさまこそが、まさにあなたさまをお思いする思いの積もっている私の心
なのでございます。「おもへども…わけねば」はそのままであへと論理
的に続かない。身を二つに分けられない結果、結局は宮仕えの方にしばら
れてしまっているが……という気持ちを脈絡上おぎなって解せばよい。積
雪を我が心とするについては、こんなにひどい積雪ではとても帰れそうも
ないが、それこそ本望だとみる説もある。しかし、特に修飾語として冠せ
られている「めかれせぬ」に注意したい。雪は、この庵室を目離れせずお
とずれ積もっている、からだは公務にしばられているからともかく、心は
まさにこの雪のように、目離れせずいつもおとずれたいと思っているの
だ、の意と解すべきだろう。(講談社文庫・森野宗明『伊勢物語』)

以上いずれも『新註』の言うように、この解釈(A・Bとも)ではわかりにく
いので種々説明を加えているが、なお釈然とせず、そもそも「目離
る」の意味のとり方が誤っているようである。「離る」とは、

○時間的に相会する機会が遠くの意にも、空間的に距離が大きくなる意に

も用いる。 (『時代別国語大辞典・上代編』)

- ◁空間的・心理的に、密接な関係にある相手が疎遠になり、関係が絶える意。…≫①間遠になる。途絶える。(用例、略。以下も同じ) ②(心が)はなれる。間柄が切れる。③立ち去る。立ち退く。(岩波古語辞典)
- のように用いられる語で、したがって「目離る」は、
- 見ることが遠ざかる。逢わぬ日数が重なる。…「佐保過ぎて寧楽の手向けにおく幣は妹を^{めかれず}目不離あひ見しめとぞ」(万300) (時代別)
- 親しいものを見ずに疎遠になる。「さしならびめかれず見奉り給へる年頃よりも」<源氏若菜上> ((名))関係の深い人や物から離れて、それを見ずにいること。(岩波古語辞典)
- 見馴れていた人や物を次第に見なくなる。だんだん会わなくなる。

(日本国語大辞典)

と説明のある通りで、「雪がやむ間もなく降り続ける」とか「目から離れずつくづく見続ける」とか解するのはむしろ誤解とすべきであろうと思われる。それにそう解しては『文庫』などの言うように上の「わけねば」を承ける表現がないことになってしまうのである。

「ゆき」は以下の例のように「行き」と「雪」との掛詞と解すべきである。さように解してはじめて「めかれせぬ」との続きが了解でき、かつ「わけねば」の続きも明確となるのである。

◇君がゆく越の白山知らねどもゆきのまにまにあとはたづねむ

(古今・離別・391)

◇君のゆく越の白山知らずともゆきのまにまにあとはたづねん (大和・75)

◇山里にわれをとめて別れ路のゆきのまにまに深くなるらむ (同・87)

◇白山にふりにしゆきのあとたえて今はこしちの人もかよはず (同・95)

こども「行き一雪」と掛けて用いているのである。親王の庵室に^{めか}目離ることなく始終参上したいとは思うのだが、何しろ「おほやけのみやづかへしければ、つねにはえまうです」といった状態にある。この身を二つに分けて、一方は親王の庵室へ、もう一方の身は宮仕えにというふうにいけばよいのだが、それもとても望めない。今しきりに雪が降り積もっているが、そのように親王のもと

へ目離れせずに「行き（行くこと）」の積もることが、私の気持ちです、というのである。そしてその裏には一般の解のように、雪が積もれば帰れなくなるから、それを口実にして親王のお傍に居れる、即ち「雪の積もるぞわが心なる」という気持ちも寄せているのである。伊勢物語の常例であるが、ここも和歌の気持ちを地の文で「公の宮仕へしければ常にはえ詣でず」「もとの心失はで詣でける」と解釈しているわけである。和歌の口訳をしておく。

宮様のことを思うのですが、公の勤務があり、この身を二つに分けられぬものですから、御無沙汰せず始終宮様のお傍に行くこと（行き）が、この雪の降り積もるようにしきりに度重なること、それが私の気持ちでございます——雪がこう積もることも（帰れなくなっていつまでもお傍にお仕えできるので）私の望みでして——

2 心ざしはたさむ

昔、いとわかきおとこ、わかき女をあひいへりけり。をのをのおやありければ、つゝみて、いひさしてやみにけり。

年ごろへて、女のもとに、猶心ざしはたさむとや思けむ、おとこ、うたをよみてやれりけり。

今までにわすれぬ人は 世にもあらじ をのがさまぎま年のへぬればとてやみにけり。

おとこも、女も、あひはなれぬ宮づかへになんいでにける。（第86段）

この一段では傍線部の解釈が問題である。

○「心ざしはたさん」は、昔のおもひをとほし遂んといふなり。

（細川幽斎『伊勢物語闕疑抄』）

○「心ざしはたさむとやおもひけん」とは、思ひながらいひさしたる心ざしの、猶のこりたるを、いひはたしてやまんとやおもひつらんなり。或注に、昔の思ひをとほしとげんといふなりとあるは、しからず。歌の後の「とてやみにけり」といふを思ふべし。

（勢語臆断）

このような解釈は近代になっても同じで、

○かねてからの思ひをとげよう。……男の方でふと思ひをかへして、心をひいて見る気になつて歌をやつて見るが返事がない。もつとも、男の歌も積極性を持ったものではなかつたのである。(評解)

○やはり昔の、女に対する思を遂げようと思つたのであろうか。(新註)

○何年か過ぎて男は、改めて女に交渉をして見る気になつたので、まず女の気を引いて見たのである。これは有り得ることである。ところが男は、以前既に約束はしてあるので、熱意をもって強く言う気にはなれず、以前の継続として生ぬるい交渉をしたのである。これまた有り得ることである。男の夢見勝ちな心からいえば、これは自然なことであるが、女は男よりも实际的であるから、こうした生ぬるい交渉に対しては答える気になれず、返歌をしなかつたものと見える。これも又、有り得ることである。

(窪田空穂『伊勢物語評釈』)

○男はやはり年来の思いを遂げようと思つたのだろうか。(大系)

○やはりかつての恋の実を結ぼうと思つたのだろうか、

(上坂信男『伊勢物語評解』)

○「なほ……思ひけむ」は、挿入部。「心ざし」は、女に対してもとからいだき続けていた恋心、気持ち。〔訳〕やはり長年思いつめていた恋をつらぬきとげようと思つたのだろうか、(文庫)

○やはり最初からの恋をとげようと思つたのだろうか。

(森本茂『伊勢物語全釈』)

○男の気持ちも歌も、あいまいな段である。「なほ心ざし果さむ」は、とだえていた間柄を復活してやはり夫婦になろう、という気持ちであろう。それなら歌はもっと積極的な復縁の意思を示すものであるべきなのに、互いに別の生活になりましたね、と疎遠を認めるような内容であり、まして「とてやみにけり」では話にならない。(集成)

と解すのである。すると当然『集成』も言っているように、次の歌と「とてやみにけり」とが続かない。そこで、

○以下とのつながりがわるくて解し難い。或は次に男の、女に対する「心ざしはたさむ」とする意志表示の歌があったのが落ちたのかも知れない。(新註)

○この歌、前からの続き工合が悪くて意味が明瞭でない。伝為氏筆本・谷森本・神宮文庫本などでは前の一節が「女のかたよりなをこの事とげんといへりければおとこうたをよみてやれりけりいかゝおもひけん」とある。男からの求愛の歌と見て「しかし万一忘れないでいるのだったらもう一度逢って下さい」の意とも取れるし、また、この前に男からの求愛の歌が脱落したとして（前記の本文によるならばそのまま）、女が男を拒否した意と見て「だから私もお受けできません」の意とも取れる。（大系）

○「とて、やみにけり」——「て」はさまざまな論理的脈絡内で接続語を構成する。「ど」「ども」類と異って特定の論理的接続関係の設定に従う語ではない。ここは場面的意味として、逆接的ニュアンスがあるとみておく。女の気を引こうとして歌をおくったが、結局だめだったのだ。〔訳〕とよんでおくれたのだが、結局はそのままおわってしまった。（文庫）

○この歌は底本の前文からいえば、「しかし、もしあなたが私を忘れないでいらっしゃるのなら、今でもあなたを慕っている私の心をくんで、昔のように語り合ってください」という含みをもつとみられるが、次の「とてやみにけり」への続きが悪い。……文脈の通りにくい個所もあり、事からの展開が十分に読みとれない。（全釈）

○このままだと、男が「もう私をお忘れでしょうね」と、女の出方を見たとき解するほかはない。自分をあいまいにしておいて、相手の出方によって事を運ぶ、傷つきたくない男なのであろうか。（集成）

と、それぞれ種々説明をつけているのであるが、いずれも無理といわざるを得ない。

「心ざし」とは、「ある対象にさし向けられた愛情とか真心とかをいう。」（拙著『古今和歌集全評釈^古注^七種集成』上巻、246ページ）、ここでは言うまでもなく、女に対する男の愛情をいう。

問題は「はたす」の語で、諸注いずれも「（思いを）遂げる」と解し、「遂ぐ」と同じにとっている。しかし、「はたす」の語義は、

○結末をつける。（時代別）

○≪事の成行きを終極まで行かせる意。転じて成行きに決着をつける意。類義

語トグ（遂）は目標を貫徹する意➤①事にきまりをつける。（岩波古語辞典）とあることから知られるように、一般の注釈はいささかずれて解しているようである。

◇万ざいははたしてこそ。なかばにてはあしからん。（宇津保・蔵開上）

◇よろづの神たちに、返申のみてぐらたてまつらん」とて、かはらにいで給とて、「いのりのことゝも、もろともに、この返申はたすこと、神仏世中にいますからぬものにやはありける」とて、（同・藤原の君）

◇ほいをこそとげめ。（同・蔵開下）

◇ただこの人の宮仕へのほい必ずとげさせ奉れ。（源氏・桐壺）

同様に、こども、女への恋の情を遂げるというのではなく、女への愛情に結末をつける、決着をつけるの意である。数年も経過しているのに、なおやっぱり未練が残っているので、この際きっぱりとこの恋の清算をしておもうと思ったのであろうか、というのである。このように解すれば、次の歌も素直に続き、諸注難儀している「とてやみにけり」も何でもなくすんなり解せる。

いま、歌の前後を訳しておく。

数年たって、女のもとに、それでもやはり、女への愛情は（この辺で）決着をつけておこうと思ったのであろうか、男は歌を詠んでやったのであった。

（長年たったこの）今までに、（恋人を）忘れず思っている人なんて、どこにもあるまいと思います。あなたも私もそれぞれ自分自分別々の生き方で年が経過してきたもんですから……

と詠んで（二人の仲は）清算してしまったのであった。

3 さくらにつけて

むかし、つれなき人を、いかでと思わたりければ、あはれとや思けん、
「さらば、あす、ものごしにても」といへりけるを、かぎりなくうれしく、
又うたがはしかりければ、おもしろかりけるさくらにつけて、

さくら花 けふこそ かくもにほふとも（いらめ） あなたのみがた
あすのよのこと

といふ心ばへもあるべし。

（第90段）

この段は、いずれの注釈も、傍線部に誤解があるものだから、歌の次の「といふ心ばへもあるべし。」の正解が得られず、無理な解釈に終始している。

まず「さくらにつけて」は、どの注釈も、

- 桜の枝に結び附けて、(評釈)
- 桜の枝につけて、(次の歌をやった)(全釈)
- 「桜花」の歌は男が「桜につけて」女に贈ったもの、と解するほかはない。(集成)

と解す。そこで「といふ心ばへもあるべし」のところは、

- 塗籠本「といふ心ばへあるらし」、定家本「といふ心ばへもあるべし」……とあり。いづれも落付かず。これにつきて清水浜臣「『といふ』以下得ガタシ。『といへるは心ばへありて成るべし』ナドナクテハキコエズ」といへれど、然らず。これは、この物語の初段に「『陸奥のしのぶもじずり誰ゆゑにみだれそめにしわれならなくに』といふ歌の心ばへなり」とあると全く同じ筆法にして、……こゝも「桜花云々」の歌の註に、某歌とともにこの句はかゝげつらむを、某歌いつしか失せて、この句のみは残れるなり。されば、この条もこの体は、

桜につけて

桜花けふこそかくも句ふらめあな頼みがたあすの夜のこと

といひやりける。

某

歌

といふ心ばへもあるべし。

などにやとおもはる。

(鎌田正憲『考証伊勢物語詳解』)

- その意は明かではない。「と詠んだが、さういふ気持も事実あつたのであらう。」といふほどの意か。(評釈)
- 「といひやりける、さる心ばへもあるべし」の意か。なお考えたい。(新註)
- 歌にいふやうな気持もきつと女にはあるのだらう。作者の女性観。

(日本古典全書・南波浩『伊勢物語』。なお『評釈』も同解)

○「といふ」以下は竄入文であろう。（中田武司『泉州本伊勢物語の研究』）

○作者の推測のことばであるが、誰の心ばへかははっきりしない。男の心持か、女の心か。〔訳〕という男の心持が、女の方にもあるにちがいない。

（新解）

○「といふ。」一諸注、連体形として「心ばへ」に続けるが如何。

（本文「といふ。心ばへも……」と切っている。校注）

○男が疑ったとおりに女には、明日云々といっても、それは仮初の慰めの気持だけであって、本当に男を慰め受け入れるというのではなかったろう、という作者の感想である。〔訳〕（と詠んでやった。）この歌でいうように、女には疑われてしかたない気持も半面にあるだろう。（上坂評解）

○「といふ心ばへもあるべし」と続けて読む説、「といふ。心ばへもあるべし」と切る説があるが、後者に従う。もっとも、「といふ。」という現在形終止は例外的で、多くの例から推せば、ここは、「とよみけり」等の表現が期待される。ただ、切らずに続けると、かなり圧縮ないし飛躍した叙述で、文脈上少々無理と思われるほどの補足をしないと、文意が通じない。「とっておくったが、事実このような気持ちが男（あるいは女）にあったのだらう」といったぐあいだ。（文庫）

○「という歌のような男の気持も、もっともだろう」と解されるが、他に、「という歌に詠んだように、あてにならぬという気持があるのだらう」とも解ける。（全集）

○このような気持も、女にはきつとあるのだらう。物語作者の推測である。「あるべし」の主語は、男・女の両説がある。男にとると、前の「また疑はしかりければ」と重複してよくない。女とみるべきであろう。この句は、「つれなき人」が逢おうと言ったのを男が疑ったが、物語作者はその男の疑いを当然のことという気持ちでのべた句である。（全釈）

○最後の評がわかりにくい。男の歌が別にある、それは「桜花」の歌の気持をこめたものだろう、というのなら、初段と同じ解説の筆法だが、「桜花」の歌は男が「桜につけて」女に贈ったもの、と解するほかはない。事柄として男が「桜花」の歌を贈ったと語ることと、そんな歌を贈った男の気持に立

ち入ることを、文章の上で切り離す工夫が、いつものようにうまくいかず、「疑はしかりければ」が、歌を贈った行為の描写につづく一方で、「疑はしかりければ……といふ心ばへもあるべし」ともつづくような、文章となったのであろう。「といふ」で切って、以下「心ばへもあるべし」を、男の歌に対する批評と読む読み方もある。 (集成)

わずかの一語の誤解が原因で、こんなに伊勢物語専門の学者が難儀して、しかもついに正解に達し得ず、足らぬところを種々糊塗するさまは実に恐るべしといわざるを得ない。以上はすべて、男が「桜花」の歌を桜の枝に付けて女に贈ったとする先入観がわざわざしているのであって、もっと素直に読めばよいのである。

「桜につけて」の「つく」は、

◇心に思ふことを、見る物・聞く物につけて言ひ出だせるなり。

(古今・仮名序)

◇春の花のあした、秋の月の夜ごとに、さぶらふ人々を召して、事につけつ、歌を奉らしめ給ふ。

◇いさゝかなることにつけて、世の中をうしと思ひて (伊勢・第21段)

と同じ意の語で、託す、こと寄せるの意。即ち、あんまり調子のよい、うまくいきすぎる女の返事に、いささか疑わしさを感じて、その気持ちを折柄美しく咲いている桜の花に託し、寄せて詠んだ歌というのであって、表現のどこにもその歌を詠んで桜の枝に付けて女に贈ったなどと書かれていない。以上のように解すれば「といふ心ばへもあるべし。」には何の問題もなく、このように歌に詠んだ趣意も男の心中には当然ありそうだが、全くの手放しで喜んでいるばかりでもないはずだと、物語作者が説明の文を付け加えているだけのことなのである。関係部の口訳をしておく。

美しく咲いていた桜に寄せて、

桜花は、とりわけ今日に限ってこんなに美しく咲き匂っても、ああ、あてにならないこと、明日の夜のことは！

という気づかひも当然ありそうだ。

4 月日のゆくをさへなげく

むかし、月日のゆくをさへなげくおとこ、三月つごもりかたに、
(借)
 おしめども 春のかぎりのけふの日の ゆふぐれにさへ なりにける哉
 (第91段)

諸注、傍線部の「さへ」のところを一般に次のように解しているが、納得しがたい。

○月日の行をば歎くべき事なるを、人生は匆々としてすごせり、此男は物思ひ有て、いつか其人に逢と思ふによりて、月日の行をさへ歎く也。

(三条西実隆『伊勢物語直解』)

○此「さへ」と云ふにふかき心有り。人生は匆々にして月日の過るをおぼえざるに、もの思ふゆゑに、たしかにおぼゆるなり。けふもその人にあはず、此月もまたあはぬなど、月日の過るを云ふなり。その人にいつあはんいつあはんと月日のゆくさへなげきになると也。

(闕疑抄)

○詞も歌も「さへ」といふに心をつくべし。さらぬだに物おもふ身なれば、月日の行くをさへなげくといひ、歌にもゆふぐれにさへとよめり。(勢語臆断)

○大かたの人の過る月日を怨むとは異にて、おもふ人にえあはでいたづらにことしの春もくるゝ事よとなげく也。故に「さへ」てふ語をおけり。只一言にて意をふくめたるは一つの文の体也。

(賀茂真淵『伊勢物語古意』)

○「さへ」に注意。思う女に逢えぬ嘆き、女のつれなさを嘆く嘆き、その上に、むなしくまた月日が流れ、春も暮れようとしている、そのいたづらに流れ去り行く月日までも嘆かわしく思われるのだ。

(文庫)

○「月日のゆくをさへ歎く」というのを、他に深い嘆きがあってそれゆゑに時間の経つことさえも嘆きの種となる、ということだと解し、その嘆きとは女のことだとするのが通説のようだが、八十八段の内容の線に沿って作られた段で、異性のことは背景にないと見るのがすなおであろう。普通の一日が経過することさえ嘆きとなる男にとって、今日は春が去って行く特別の日なのである。

(集成)

助詞「さへ」をこれらの諸注釈は「一つの物の上に、更に他の物の添い加わる意を表わす助詞」（評釈）と解するものだから、「恋の上で、逢い難い歎きをしているので、その逢い難くして月日の過ぎてゆくのもも嘆いている」（同）「思う女に逢えぬ嘆き、女のつれなさを嘆く嘆き、その上に」（文庫）とか、あるいは「普通の一日が経過することさえ嘆きとなる男にとって、今日は春が去って行く特別の日なのである」（集成）というふうに「一つの物」を何と見出ださなくてはならぬのである。

しかし「さへ」には、拙著『古今和歌集全評釈^古七種集成^注』上巻（583ページ）に明らかにしたように、例えば、

- ◇ほととぎす鳴く声聞けば別れにし古里さへぞ恋しかりける（古今・夏・146）
 - ◇玉かつま逢はむと言ふは誰なるか逢へる時左倍面隠しする（万・2916）
 - ◇をち方の埴生の小屋に小雨降り床共ぬれぬ身に添へ我妹（同・2683）
- などの「さへ」と同じく、

○⑥サへを含む句が修飾句になるときは、強い程度をあらわす。「あしひきの山左倍ひかり咲く花の」（万477）「白たへの袖左倍ぬれて朝菜摘みてむ」（万957）「六月の地副裂けて照る日にも」（万1995）……◎指す対象が動作・状態の及ぶ対象のすべてであるような場合、副詞的な全量あるいは最高程度の意になる。「人目多みあはなくのみぞ心左倍妹を忘れて吾が思はなくに」（万770）（時代別）

と説かれる意味用法の「さへ」である。拙著で明らかにしたように、古来解釈上問題になっている次の古今集の歌も同様の用例である。

- ◇かくばかり惜しと思ふ夜をいたづらに寝て明かすらむ人さへぞ憂き（秋上・190）

今ごろ何もせずに寝て明かしているような人は、いつもなら、夜のことであるから当然のことで何とも思わないのだけれど、こんなすばらしい良夜は、惜しくて、そんな人までが、どうも気に入くない。

- ◇白雲に羽うちかはし飛ぶ雁の数さへ見ゆる秋の夜の月（同・191）
- 白雲に、翼をこもごもうち振りあいながら飛ぶ雁の、普通の夜ならとても見えないその数までも見える秋の夜の月。

同様に、ここも、月日の毎日過ぎて行くことなど当然の日常茶飯事として一般には誰もそう嘆いたりなんかしていないのに、そんな月日の過ぎて行く事までもひどく嘆く男、という意味なのである。だから、さらにその年の惜しい春が過ぎて行くとなれば、いよいよ心を痛めて悲嘆するわけで、それが次の歌になっているのである。換言すれば、この歌が「春の限りの今日の日」「夕暮にさへなりにけるかな」と、あまりな痛惜のさまに、物語作者がこのような解説を加えたもので、歌に対する例の物語作者の解釈を示すものであるといえよう。『新註』が、

○普通なら月日のすぎることなどは意識しないものだが、思いを寄せる女に逢えないので、空しく過ぎる月日をつよく意識して「さへ(までも)」といったのだと解かれている。

と解するが、「思いを寄せる女に」云々以下は表現にないことで、解しすぎである。なお歌の中の「夕暮にさへ」の「さへ」は普通に説かれている「さへ」で、物語地の文の「月日のゆくをさへ」と照応していて、そこにこの一段の面白味がある。一段の訳、

昔、何でもない、月日の過ぎて行く、そんなことまでも嘆く男が、三月の月末のところに、

いくら惜しんでも春の最後の今日の日、その上その最後の日の今日の夕暮にまでなってしまったことよ。

(1978.1.26)